

異文化の中の日本の書物

鶴崎裕雄

一昨年（1988年）の夏、2週間にわたって、文部省研究費による「在外国文学資料の所在に関する調査」（研究代表者、国文学研究資料館教授長谷川強氏）に参加し、イエール大学バイネッケ図書館（Beinecke Library）と合衆国議会図書館（L.C.）に所蔵されている江戸時代以前の写本・版本を調査する機会があった。

調査員は、国文学研究資料館の新藤協三氏・吉海直人氏・いわき明星大学の田嶋一夫氏及び私の4人。調査対象は、国文学資料といっても、実際にはあらゆる分野の日本の古典籍を扱うので、主に日記・古記録の調査のため、私も調査員の一人に加えられたのである。何分膨大な書物を前にして、調査の2週間はかなりきびしいスケジュールであった。

イエール大学と議会図書館が選ばれたのは、そこにある朝河コレクションに対象をしぼったからである。朝河コレクションとは、歴史学者としてアメリカで活躍した朝河貫一博士が、両図書館の依頼を受けて収集した500点に及ぶ日本の写本・版本である。

朝河博士は、明治6年（1873年）福島県二本松の出身、少年時代より大変な努力家で、中学生の時、英語の辞書を覚えては、そのページを次々と食べてしまったという逸話がある。東京専門学校（現、早稲田大学）に学び、アメリカに渡って、ダートマス大学に留学、続いてイエール大学大学院に進んだ。卒業後、アメリカに留まり、ダートマス大学、ついでイエール大学

で東洋史・日本史を講義した。

朝河博士が日本の書物の収集依頼を受けたのは明治39年、イエール大学より日本留学を命ぜられた時である。両図書館とも朝河コレクションには“1907”という数字が記されているが、これは書物が入庫した1907年（明治40年）を示している。

収集された書物は、購入したものばかりではない。『看聞日記』や『大乘院寺社雑事記』『二水記』など、かなりの日記や古記録は、人を雇って書写させている。今のように写真技術やコピー器具のない時代、幾冊もの書物が筆で写されたのである。

新たに書写されたものには『大阪商業習慣録』『米商日記』（別名『堂島旧記』）『大阪昔時の信用制度』といった大阪の商業に関する書物が多い。これは、書物の収集にあたって、当時『大阪市史』に従事していた幸田成友博士（幸田露伴の弟）の協力を得たからである。

一方、江戸時代に書かれた武士の記録や覚書の類がある。これらは単に「覚書」とあったり、書名のないものが多く、日常の武士の儀式や慣例を記したもので、今となっては武士社会を知る好史料である。しかし江戸から明治へと新時代を迎えた時、これらの書物は全く役に立たない、陳腐な代物として、紙屑同然に扱われたことであろう。それはちょうど浮世絵と同じ運命にあった。江戸末期から明治時代、国内では無価値なものと思なされていた浮世絵は、海外では丁重に扱われ、大切に保存された。同じ頃、日本では顧みられなかった江戸時代の無名の書物も、こうしてイエール大学や議会図書館で保存されていたのである。

今回、2年近くも前の調査の事柄を一文にしたためたのは、今年（1990年）夏、スペインのマドリッド大学で開かれる国際歴史学会とドイツのボン大学で続いて催される日本中世研究セミナーに参加するからである。スペインの国際学会では、「マルコ＝ポーロ以後の古文書」（Manuscripts Resources from the Age of Marco Polo）というテーマで、ユーラシア大陸の東西を支配したモンゴル帝国の出現が世界の古文



合衆国議会図書館（L.C.）

書に与えた影響について研究発表が行われる。日本からは東京都立大学の峰岸純夫氏や大阪市立大学の河音能平氏が中心になって参加準備が進められている。

このような国際歴史学会で必ず取り上げられる論文に、朝河博士の英文で書かれた『入院院文書』(The Documents of Iriki)の研究がある。これは日本の古文書が欧米語で海外に紹介された最初の論文である。国際学会への参加準備会で朝河博士の名を耳にして、イエール大学や議会図書館で手に取った朝河コレクションを思い出した。

初めて朝河コレクションを手にして驚いたことは、和綴の写本や版本が、現在の一般図書のように、洋風に装丁されていることであった。そのため天地や横が裁断されてしまった書物もある。日本に帰って『幸田成友著作集』を読み返してみると、「朝河貫一氏が日本で購はれた時、数冊分を合して全然西洋風に改装せられたのを見て、自分は不賛成を唱へたことを記憶する」(第7巻 364頁)とあった。洋風に装丁された和綴本を見て、幸田博士も、同じように奇異に思われたのである。

しかし、もう少し考えてみると、朝河博士の改装をそう簡単には否定できないことに気付く。今でこそ議会図書館の日本フロアの貴重図書の書架には、帙や木箱に入った和綴本が置かれているが、今世紀の初め、80年も以前、日本や中国の書物がアメリカやヨーロッパの図書館に収められるには、洋風に改装する方法が一番良か



イエール大学パイネツケ図書館前の調査員



イエール大学のあるニューヘブン市墓地の朝河貫一博士の墓

ったのかもしれない。横に積み上げるのではなく、立てて並べる書架の中で、つまり異文化の中で、和綴本が保存される一つの手段といえよう。

それはまた、明治から昭和の初めまで、国際社会の中で一流の学者として活躍した朝河博士の生き方に通じるものかもしれない。朝河博士の時代から今日までの間、日本の変化は目撃しい。日本の国際化と同様、あらゆる分野の学会の国際化が求められている昨今である。

朝河博士は、昭和23年(1948)76歳で亡くなった。

墓は、永年務めたイエール大学の所在地、ニューヘブン市の墓地にある。